歴史地理学　46－1（217）15～31　2004.1

那須岳白湯山・高湯山信仰の分布について

廣　本　祥　己

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．登山口の史料に見られる信仰の分布
　(1) 三斗小屋口
　(2) 湯本口
Ⅲ．各地の史資料に見られる信仰の分布
　(1) 歴史史料
　(2) 参詣事例
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

栃木県と福島県の県境に位置する那須岳は，那須火山群の総称である[1]。今日も噴煙を上げ続ける茶臼岳を主峰とし，その北方に連なる朝日岳，三本槍岳などの山々で構成されている。この那須岳には，江戸時代から昭和期に至るまで，「白湯山（はくゆさん）」または「高湯山（たかゆさん）」と呼称される霊場が存在し，多くの行者を集めていた。本論文は，那須岳に展開した白湯山・高湯山信仰について，その分布を明らかにすることを目的とする。

従来，山岳信仰に対しては，地理学の側から，信仰の分布や参詣路・拝所，宗教集落などの研究が行われてきた。このうち信仰の分布に関しては，民俗学の宮田（1961，1970）を始まりとする信仰圏研究があり[2]，地理学においても岩鼻（1983）[3]，松井（1995）[4]，金子（1997）[5] 等によって継承され，成果が出されている。

岩鼻（1983）は，宮田（1970）の提示した同心円的信仰圏モデルを批判し，出羽三山を対象に，3つの圏域から成り立つ信仰圏の構造を明らかにした。そして，岩鼻（1983）の成果を受けた松井（1995）は，笠間稲荷神社を対象に，山岳信仰以外の信仰においても，山岳と同じく同心円的な信仰圏を見出した。金子（1997）は，既に宮田（1970）が取り上げた岩木山について，信仰圏の構造を具体的に明らかにした。

岩鼻（1983）以降行われてきたこれらの信仰圏研究においては，信仰の空間的広がりを同心円的圏構造と捉えて考察する方法が中心である。しかし，小田（1993）[6] によって指摘されたように，提示された信仰圏の時代変化についてはほとんど言及されてこなかった。信仰の分布を把握するために用いる史料や民俗資料は，それぞれの史料が作成された年代，民俗調査が対象とした年代における信仰の所在を示すものである。したがって，資料の作成年代を考慮することによって，信仰圏の時代変化を明らかにすることができる。そこで，本論文においては，白湯山・高湯山信仰の分布を明らかにするとともに，その時代変化についても考察する。

次に，白湯山・高湯山の概要について述べる（図1）。白湯山・高湯山は，茶臼岳の西側

キーワード：那須岳，山岳信仰，信仰の分布，石造物，文字史料

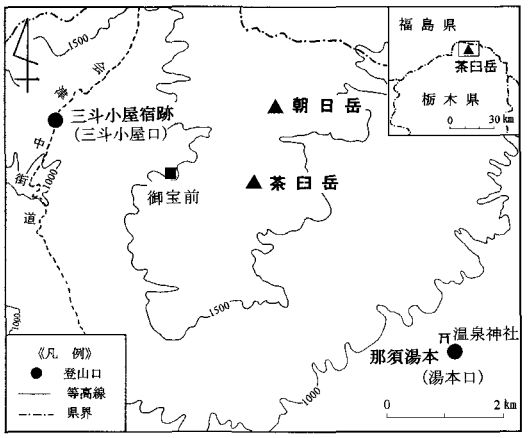

図1　研究対象地域の概要

8合目付近に位置する温泉の湧出地「御宝前」を御神体とし，その他にも28ヵ所の拝所を有した霊場であった。霊場への登山口は2ヵ所に存在し，その1つは，茶臼岳北西部の山間に位置する三斗小屋宿（栃木県黒磯市）を起点とする「三斗小屋口」であり，もう1つは山麓南東部の那須湯本（栃木県那須町）を起点とする「湯本口」であった。2つの登山口は，近世・近代を通じて，それぞれ異なる寺院・神社による支配を受けており，霊場の呼称も異なっていた。「白湯山」というのは，三斗小屋口において用いられた霊場の呼称であり，「高湯山」とは，湯本口において使用された呼称であった。三斗小屋口からの参詣は御宝前・茶臼岳・朝日岳，湯本口からの参詣は茶臼岳・御宝前・朝日岳の順番で登拝する，「三山掛け」と呼称される形式で行われた。

三斗小屋宿は現在廃村となっているが，元禄8年（1695）に開削された会津中街道の宿場として，新たに山間に設けられた宿場であった。一方，那須湯本は，天平10年（738）には既に発見されていたとされる那須湯本温泉[7]と，式内社である温泉神社を有し，現在も湯治場・観光地として繁栄している。

白湯山・高湯山信仰は昭和20年代を最後に消滅し，参詣路や拝所は場所も分からなくなるほどに荒廃した。しかし，往時の信仰の様子を伝える，以下のような文献が刊行されている。

三斗小屋口白湯山に関する既存の文献としては，まず，田代音吉による『三斗小屋誌』が挙げられる[8]。同書は，三斗小屋宿の分教場へ臨時教育のために1ヵ月間赴任した著者[9]が，三斗小屋宿の動植物や地理，歴史，民俗等について記した地誌的な書であり，その中で白湯山信仰について，主にその歴史や三斗小屋宿に残る石造物の説明がなされている。

次に，『三斗小屋誌』と同じく地誌的な書として，中村敬の『那須』が挙げられる[10]。那須地域の地誌であるとともに，那須の山々の登山案内書でもある同書は，那須登山史研究の一環として白湯山・高湯山信仰に言及し，また，那須岳の登山道として白湯山・高湯山の参詣路を紹介している。記述の内容は，参詣路の道筋や道中の拝所の様子，信仰を支配した寺院についての調査の結果であり，著者によって初めて白湯山・高湯山信仰についての詳細な調査が行われたと言える。

そして，『三斗小屋誌』と『那須』の現代版とも言うべき文献が，三斗小屋温泉誌刊行委員会編『三斗小屋温泉誌』である[11]。本書は三斗小屋宿の北東に位置する三斗小屋温泉を中心とした地誌であり，登山案内書をも兼ねている。同書では，前述した『三斗小屋誌』と『那須』の内容をふまえた白湯山信仰の概要が述べられているほか，『那須』と同様に，かつての白湯山・高湯山の参詣路を著者みずからたどって旧登山道として紹介しており，現在白湯山・高湯山信仰を調査するうえでの道標ともなる記録である。

以上に挙げた3書は，既に廃れた信仰を紹介し，登山に熟達した著者たちによって，荒廃した旧参詣路の道筋の記録がなされている点で，白湯山・高湯山信仰研究の基礎と言うべき文献である。しかし，登山口に現存する

史料や，白湯山・高湯山信仰に関連する各地の史資料を視野に入れ，白湯山・高湯山信仰について本格的に論じた研究は，地理学以外の分野においても存在しない。筆者は，かつて，近世に起こった白湯山・高湯山の霊場支配権をめぐる争論について，登山口の史料をもとに明らかにした[12]。本論文では，登山口以外に見られる各地の史資料も用い，白湯山・高湯山信仰の分布について明らかにすることを目的とする。

白湯山・高湯山信仰の分布を解明する資料としては，白湯山・高湯山を支配した寺院・神社に，参詣者の所在地を把握することができる参詣者名簿等の文字史料，および参詣の詳細を把握できる文字史料がほとんど残されていない[13]。したがって，白湯山・高湯山信仰の分布を明らかにするためには，両登山口に見られる石造物等の史料，および各地の信仰に関する史料や民俗調査報告等を用いて考察するしかない。信仰の分布を把握するために用いるこれらの資料は，近世のものと近代のものに分類される。本論文においては，資料の年代にも着目して，白湯山・高湯山それぞれへの信仰の分布が時代によってどのように変化したのか，についても検討する。

なお，従来の信仰圏研究の流れにおいては，信仰圏がどのような圏域に区分され，どのような形を描くか，という空間的な問題が重要な論点と見なされてきた傾向がうかがえる。多くの参詣者を抱える大規模な霊山で，参詣に関する資料が豊富であるならば，信仰圏内部を区分して考察することも可能である。しかし，白湯山・高湯山信仰は，これまで信仰圏が明らかにされてきた霊山に比べ，信仰圏の規模が小さい。また，前述した通り，信仰の分布を把握するための史料や民俗誌の数が，他の霊山と比較して少ない。したがって，本論文では，信仰圏内部を参詣習俗や講の種類によって区分し，圏構造として考察することは行わない。このような理由において，本論文の題は「信仰圏」とせず，「信仰の分布」とした。

Ⅱ、登山口の史料に見られる信仰の分布

(1) 三斗小屋口

信仰の分布を知ることのできる三斗小屋口の史料としては，以下の2種類が挙げられる。1つは，三斗小屋宿跡および参詣路途中の拝所に立てられている石造物である。もう1つは，白湯山神社によって明治・大正期に作成された寄付帳である。この2つを史料として用い，三斗小屋口白湯山の信仰の分布を明らかにしたい。

三斗小屋宿跡に立つ白湯山信仰に関する石造物は，全部で13基存在する[14]。そのうち，建立者の居住地が明確なものは9基であった。この9基の石造物のうち，4基には建立者が多数存在するので，個別に説明を補足したい。

まず1基目は，文政6年(1823)に建立された「奉再額」の石碑であり，白湯山参詣路の入り口であった鳥居の脇に建立されている。したがって，文政6年に鳥居の額を新調した際の記念碑と思われる。石碑に刻まれた建立者のうち59名の居住地19ヵ所と，建立者としての村中4ヵ所を確認した。

2基目は，文久3年(1863)に建立された石灯籠である。三斗小屋宿跡の中央に立つこの石灯籠は，石造物の中でも最も大型で，台座には191人の建立者名と38ヵ所の建立者居住地名が刻まれている。『三斗小屋誌』には[15]，この石灯籠について，北条村の百人講中によって建立されたものであることが記されている。また，石灯籠の台座には，講元として北条村・藤塩(ふじしお)村・長南寺(ちょうなんじ)村の村名が刻まれている。いずれの村も，那須町西部付近に隣り合って存在する村落である。したがって，文久3年の当時，那須町の北条村が中心となって，近隣の村とともに，白湯山信仰を

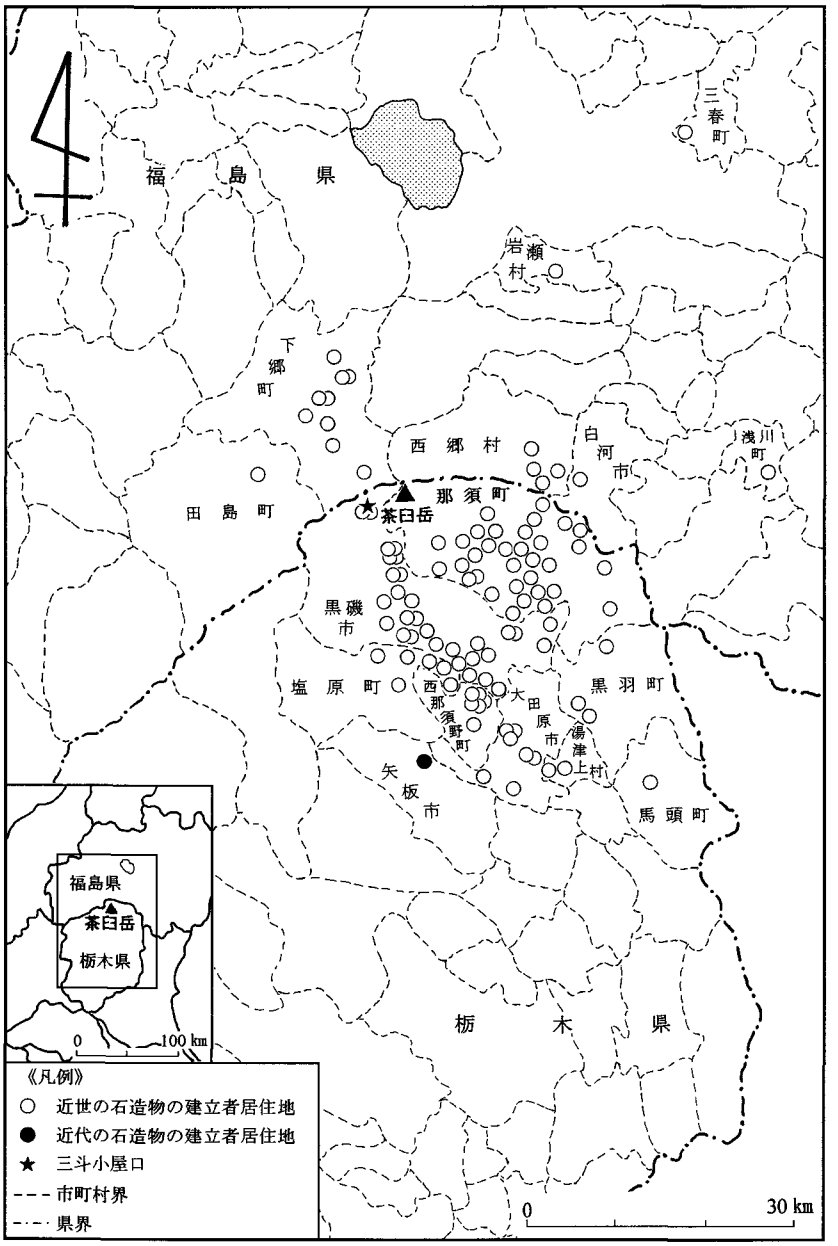

図2　三斗小屋口の石造物に見られる白湯山信仰の分布

目的とする「百人講」という講を組織していたことが判明する。台座に刻まれたその他の村も，百人講に加わっていたのかどうかは不明であるが，北条村・藤塩村・長南寺村を主体とする百人講が中心になり，近隣諸村の協力を得て，この石灯籠を建立したと考えられる。

3基目は，文久3年(1863)に建立された大日如来の石仏である[16]。台座には，発願主として，三斗小屋口の先達を務めていた西光院の僧侶の名が刻まれている他，4つの村中・講中，および21ヵ村の28名の建立者が刻まれている。これらの建立者の中には，「江戸三田屋敷」・「野州佐野」・「会津若松」・「郡

山」に1名ずつと「江戸浅草」に2名の建立者が存在するが，いずれも詳細な地名が刻まれていないこと，飛び地的に離れていることから，後の作図には含めなかった。

4基目は，昭和59年（1984）に再建された石灯籠である。復元前の石灯籠の建立年は不明であるが，復元されていない台座には，江戸時代に三斗小屋口の別当を務めていた法善寺と，先達の西光院の名が刻まれている。したがって，以前の石灯籠は，江戸時代に建立されたものであったことは確実である。台座に刻まれた建立者の多くは判読することができなかったが，19ヵ村の64名の建立者を確認した。

次に，参詣路途中の拝所に立つ石造物について見てみたい。石造物の立つ白湯山の拝所は，「シズノ平」と呼称される。このシズノ平には，全部で25基の石造物が建立されている。そのうちの多くは石仏であるが，そのほとんどは頭部を欠損しており，明治期に廃仏毀釈が行われたことが推測できる。全25基のうち，建立者居住地の判明したものは5基のみであった。ただし，5基のうち2基は，白湯山の先達を務めていた野間村（現黒磯市野間）の西光院によって建立された西光院の僧侶の墓碑であり，分析の対象外とする。他の石造物についても，既に『三斗小屋温泉誌』において調査がなされているため[17]，詳細は省略する。

以上紹介してきた三斗小屋口の石造物から，建立者居住地を図示したものが図2である。居住地は，史料に書かれた地名をもとに図示した。藩政村を単位にして図示すると，那須町における藩政村とその他の市町村における藩政村とでは，藩政村の規模が異なるため，実際の居住地による分布とは大分異なる結果となる。したがって，図においては，枝村を含む地名ごとに記号を落とした。この表記方法は，図3以下の各分布図においても同様である。

図2の分布を概観すると，建立者の集中している地域は現栃木県那須町と現黒磯市であり（以下，分布の概観において「現」を省略する），周辺の塩原町，大田原市，福島県西郷村，下郷町付近にも多く分布している。図2中に表した分布の外辺は，福島県三春町・浅川町・栃木県矢板市・馬頭町である。

なお，三斗小屋口における石造物のうち，近代に建立されたものは下伊佐野村（現栃木県矢板市）の人々によって建立された1基のみであった。したがって，石造物のみからでは，信仰の分布における時代差を考察することはできない。

そこで，次に，近代に作成された文字史料である白湯山神社の寄付帳を用い，近代における信仰の分布を考察してみたい。白湯山神社の寄付帳は，全部で7冊存在する[18]。いずれも，明治時代に三斗小屋宿に創建され，寺院に代わって白湯山の管理を行うようになった白湯山神社によって作成されたものである。

これらの寄付帳のうち，一番古いものは，明治15年（1882）に作成された「白湯山神社鳥居再建緒言」と書かれた寄付帳である。表紙裏には，寄付を募った経緯として，三斗小屋宿に建っていた白湯山登山口の鳥居が，戊辰戦争によって慶応4年（1868）に破壊されたため，鳥居の再建を行うべく寄付を集めるに至ったと記されている。この寄付帳には，17人の寄付者名が書かれているが，残念なことに居住地名が記されていない[19]。

残りの寄付帳6冊のうち，寄付帳が作成された年代が明記されているものは4冊である。4冊のうち，1冊は大正13年（1924）に作成された寄付帳で，それ以外はすべて大正14年（1925）に作成された寄付帳である[20]。寄付を募った経緯については，大正14年の寄付帳によると，明治41年（1908）に三斗小屋宿で火災が起こり，白湯山神社の社務所が全焼した。以降，しばらく社務所は再建され

ず，社務や参詣者にとって支障をきたしていた。そこで，神主の室井五郎左衛門以下，三斗小屋宿の住人6名が発起人となり，社務所再建のために寄付を募った，ということである。なお，大正13年（1924）作成の寄付帳には，寄付を募った経緯が記されていない。しかし，年代が近いため，大正14年（1925）の寄付帳と同様の目的のもとに作成されたと思われる。

これらの寄付帳に記された寄付者の居住地を図示すると，図3のとおりである。寄付者の居住地は，黒磯市西部と下郷町北西部に一番多く広がり，田島町の中心部にも集中して存在している。下郷町・田島町は，昭和20

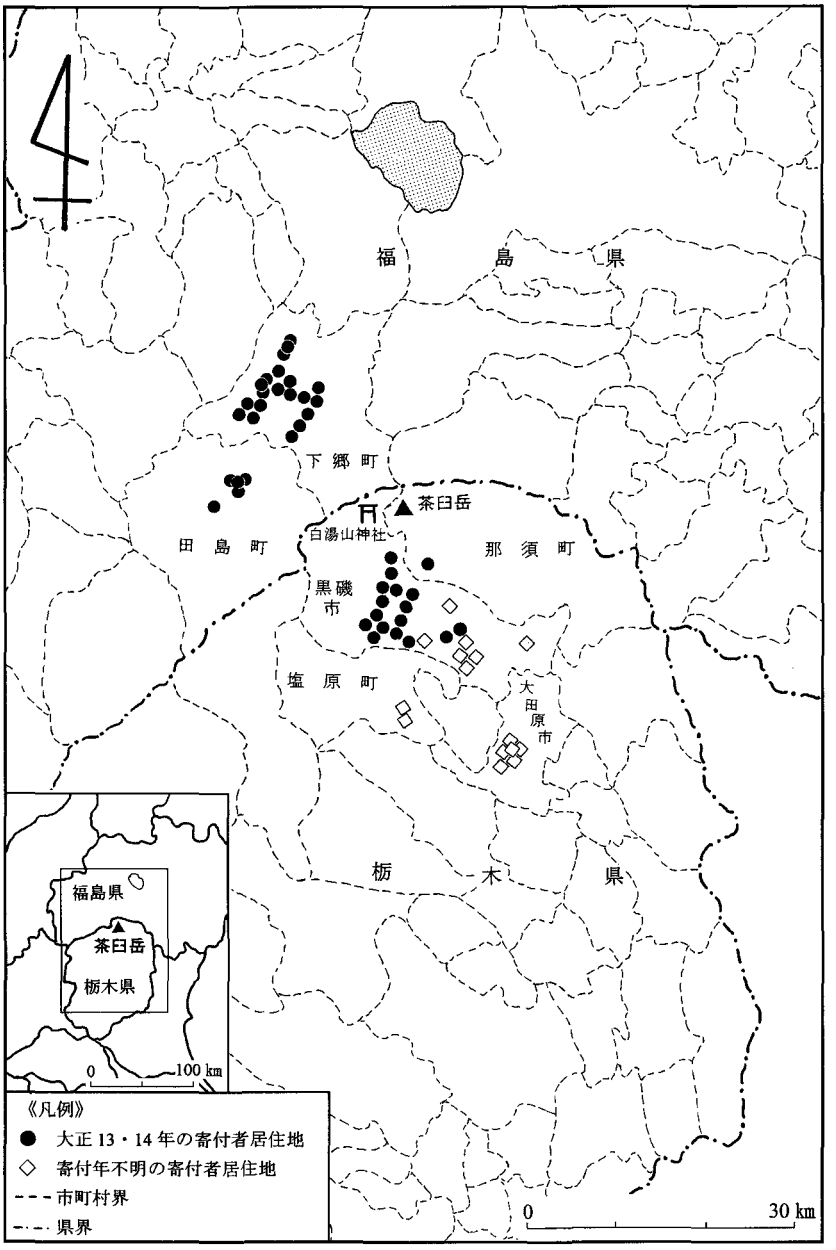

図3　白湯山神社の寄付帳に見られる白湯山信仰の分布

年代まで白湯山参詣が盛んに行われた地域であり，大正14年（1925）の当時も参詣が行われていたものと思われる。したがって，白湯山神社へ寄付する人も多かったことが推測できる。一方，当時黒磯市内の各地域においては，白湯山参詣が行われていたのかどうかは定かではないが，当時白湯山神社の神主であった室井五郎左衛門氏は，黒磯市内の板室村に在住していた。したがって，黒磯市内の寄付者の多さは，室井氏の地縁や交際範囲も影響していると思われる。

図3には，作成年代不明の寄付帳2冊についても寄付者の居住地を示した。これを見ると，栃木県内の黒磯市東部，大田原市中心部，塩原町東部に広がっており，いずれも大正14年（1925）の寄付者居住地の延長地域である。したがって，これらの2冊の寄付帳は，他の4冊の寄付帳と同目的のもと，すべて同一時期に作成されたものである可能性が大きい。

では，主に大正期に作成された寄付帳より判明する寄付者居住地の分布について，まとめて考察してみたい。図3に示した大正期の寄付者居住地は，福島県下郷町と栃木県黒磯市内，福島県田島町・栃木県大田原市の中心部である旧宿場町に集中している他，わずかに那須町，塩原町にも広がりを見せた。いずれの地域も白湯山神社の近郊であり，石造物の建立者のような遠隔地の寄付者は見られない。この理由の1つとして，寄付の集め方が挙げられる。寄付帳には，所々に「参納」または「参銭」と記してある。「参納」とは，寄付者が白湯山神社へ来て寄付を納めていったことを指すものと思われる。また，集落の最後に，発起人の名と印が記された寄付帳も存在した。これらの記述より推測すると，この寄付は，おおむね発起人自らが集めて廻ったものであり，神社へ納めに来た人々に対しては「参納」と付記した可能性が大きい。したがって，寄付者も近郊地域に限られたものと思われる。

ここで，江戸時代に建立された石造物に見られる建立者居住地の分布（図2）と，大正期の寄付者居住地の分布（図3）を合わせ，白湯山信仰の分布における時代差について考察したい。双方において，分布の広がりが共通して見られる地域は，下郷町と黒磯市である。また，田島町の中心部と大田原市の中心部，塩原町の東部にも，共通して分布が存在する。したがって，これらの地域においては，江戸時代から大正期まで，三斗小屋口白湯山への信仰がなされていたことが推測できる。一方，石造物建立者が多く所在した那須町においては，大正期には白湯山信仰が廃れていた可能性が考えられる。

以上，三斗小屋口における石造物と寄付帳を用い，江戸期から大正期の白湯山信仰の分布について考察してきた。次に，霊場におけるもう1つの登山口であった湯本口に話を移すこととする。

(2) 湯本口

江戸時代において，湯本口高湯山を支配していたのは，那須湯本の月山寺・観音寺という寺院であった。しかし，両寺とも現在は存在せず，両寺に伝わった高湯山に関する文字史料も管見に入っていない。また，明治時代以降，那須岳神社となった高湯山を管理した温泉神社にも，高湯山信仰の分布を把握できる文字史料は存在しない。したがって，信仰の分布をつかめる湯本口の史料は石造物のみである。湯本口においては，登山口となっていた温泉神社や，江戸時代において湯本口の別当を務めていた月山寺の所在地付近，山中の拝所などに，高湯山信仰に関する石碑が建立されている。そこで，それらの石造物を史料とし，高湯山信仰の分布を考察したい。

温泉神社境内に立つ高湯山の石造物は，全部で7基存在する。各石造物に関する説明は省略するが[21]，7基のうち，建立者の居住地

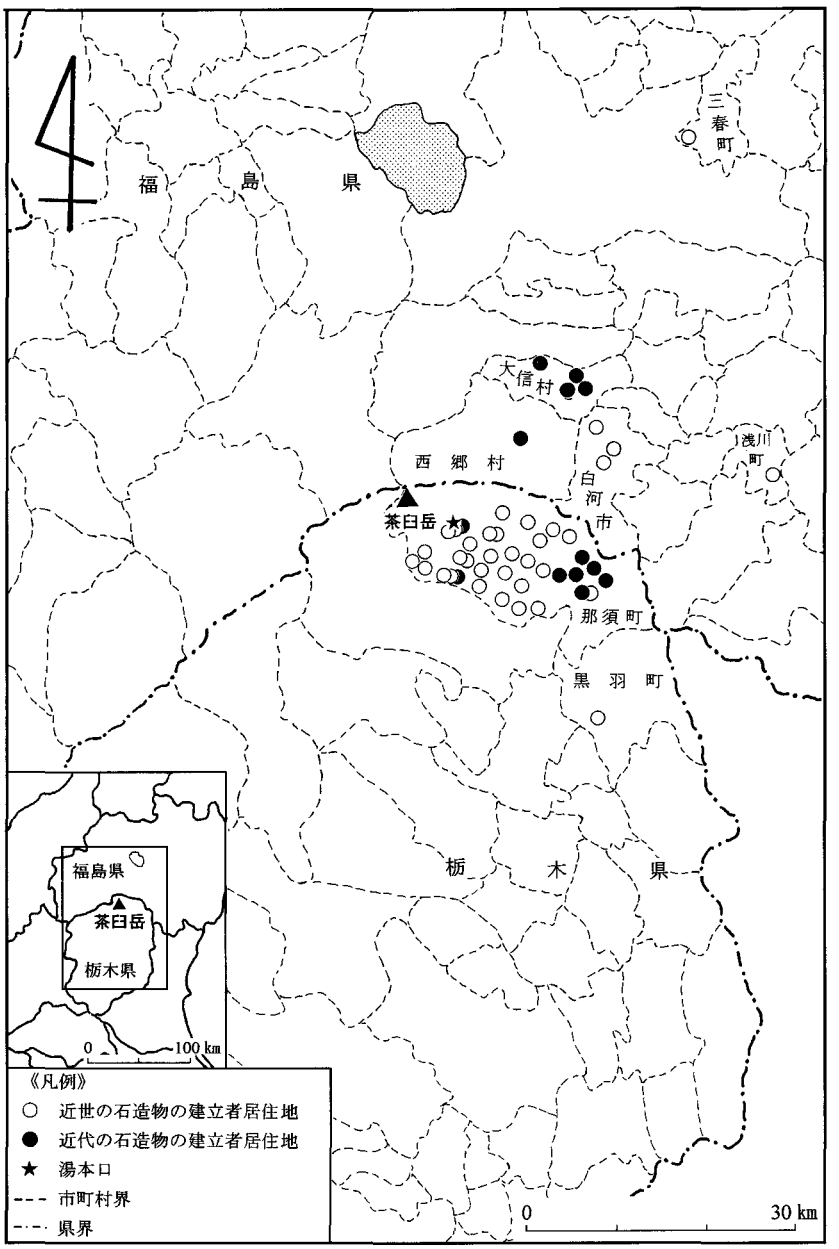

図4　湯本口の石造物に見られる高湯山信仰の分布

が刻まれたものは6基である。その中で，江戸時代の石碑は，那須湯本の人々により建立された1基のみで，他はすべて明治時代に建立された石造物である。

また，温泉神社の東側にも，2基の高湯山碑が存在する。これらの石碑の建立場所は，江戸時代に高湯山の別当を務めた月山寺が存在した場所に近い。また，両方の石碑の碑文に「月山寺」の名が刻まれている。したがって，これらの石碑は，月山寺が建立に関与した石碑であると思われる。これら2基の石碑のうち，1基は，月山寺と寄付者によって建立された高湯山碑である。そして，もう1基は，黒羽田町（現栃木県黒羽町）の鈴木忠七

という人物を中心とする人々によって建立された先祖供養塔である。この石碑の碑文には高湯山の説明が刻まれており，高湯山信仰の一環として建立された石碑と考えられる。また，この石碑の側面・背面には多くの戒名が刻まれており，高湯山は，死者供養の霊山として信仰されていたことが考えられる。

これら2基の石碑の台座には，寄付者と村名が刻まれている。しかし，台座の欠損が激しく，寄付者についてはほとんど読み取ることができなかった。かろうじて判明するのは，後者の石碑の建立者居住地である黒羽田町のみである。

次に，山中に建立された石造物を見てみたい。山中の石碑は，2ヵ所に見られる。1ヵ所は，那須湯本から高湯山へ行く参詣路の途中に存在する平石（ひらいし）と呼称される大きな岩で，この上に1基の石碑が建立されている。もう1ヵ所は，茶臼岳中腹に存在する弥陀ヶ原（みだがはら）と呼称される拝所である。ここには，石仏を中心とする多くの石碑が建立されている。

平石の石碑は，嘉永2年（1849）に，9ヵ村の80人および16ヵ村の村中が寄進を行って建立したものである。世話人の居住地は湯本村・長南寺村・大深堀（おおふかほり）村・高久（たかく）村であり，いずれも那須湯本近郊の村々である。したがって，平石の石碑は，那須湯本の近隣諸村を中心とし，那須町内と近隣の諸村によって建立されたことが判明する。

一方，弥陀ヶ原の石碑は，全部で25基存在する。このうち，江戸時代に建立されたものは14基で，明治時代以降に建立されたものは3基である。また，全体のうち，13基が墓碑であり，それらの中でも，女性と子供の墓碑が8基存在する。このことより，弥陀ヶ原は死者供養の地として信仰されていたことが明らかであるが，特に女性と子供の供養が行われる場合が多かったとも考えられる。これら25基の石碑のうち，建立者の居住地が判明する石碑は9基のみである。

以上，湯本口に建立された石碑について，建立場所別に見てきた。これらの石碑より判明した石碑建立者の居住地を図示すると，図4のようになった。図4より，湯本口の石碑に見られる高湯山信仰の分布を概観すると，高湯山信仰は，茶臼岳の北東から南東にかけて，栃木県那須町の各村を中心とし，近隣の福島県西郷村・白河市・大信村付近まで密に広がっていた。また，距離の離れた福島県三春町においても，信仰が存在したことが判明する。

なお，明治期の石碑の建立者居住地は，那須町東部と大信村に集中し，その他は，那須湯本とその近郊1ヵ村のみに見られる。したがって，高湯山は，江戸時代においては，那須町西部・中部を中心に信仰され，福島県三春町あたりまで広がりを見せていたが，明治期になると，遠隔地から信仰は廃れていき，那須町近隣でのみ信仰されていたと捉えることもできる。しかし，明治期に建立された石碑の絶対数が少ないため，湯本口の石碑のみから，信仰の分布の時代差について正確に判断することは困難である。次章で述べる他の資料と合わせ，改めて考察することとしたい。

Ⅲ．各地の史資料に見られる信仰の分布

(1) 歴史史料

白湯山・高湯山に関する史料は，登山口に存在するのみではない。かつて白湯山・高湯山を信仰していた地方には，石碑が建立されていたり，信仰に関する文字史料が残されていたりする。各地におけるこれらの史料の所在を把握することも，信仰の分布を明らかにするうえで必要である。

これらの史料の所在を確認するための資料としては，栃木県全域と福島県南部（郡山市・会津若松市以南）における各地の市町村史や石造物の調査報告書，史料所在目録等を

表1　白湯山・高湯山信仰に関する各地の文字史料

番号	史料名	年代	所在地	所蔵者
	《白湯山に関する史料》			
1	木札「白湯山三社」	(明治時代以降)	郡山市湖南町	三浦円海氏蔵
2	版木「白湯山　別當　法善寺」	(江戸時代)		
3	「覚」	寛政12年(1800) 7月10日	下郷町栄富・成岡	松永則暢氏蔵
4	「白湯山奉納物　定家手引帳」	慶応2年(1866) 7月吉日		
5	「下野国白湯山代参帳」	文久4年(1864)正月	下郷町中妻	玉川英二家文書
6	「白湯山参詣餞別　受納帳」	明治29年(1896)旧7月14日		
7	白湯山のお札4枚	江戸時代	田島町川島	川島　弘氏蔵
8	「差上申一札事」	嘉永5年(1852) 7月25日	那須町伊王野	鮎瀬家文書
9	「免許之事」	嘉永5年		
10	「法善寺・西光院連名　勇之丞宛状」	嘉永5年(1852) 7月24日		
11	「覚」	不明(嘉永5年中か)		
12	「白湯山行中諸入用扣帳」	嘉永7年(1854) 7月7日		
13	「白湯山役人連名　取立帳」	嘉永7年(1854) 7月吉日		
14	「白湯山日山許状」	天保8年(1837)	黒磯市本郷町	渋井家文書
15	「白湯山日山許状」	天保8年(1837)		
16	「白湯山百人講中　連名帳」	安政6年(1859) 7月26日	大田原市実取	森家文書
17	「入湯小遣い帳」	慶応元年(1865) 6月29日	真岡市下高間木	複製を真岡市役所が所蔵。
	《高湯山に関する史料》			
18	「高湯山御銭別受納帳」	明治34年(1901)旧7月9日	岩瀬村矢沢	柳沼家所蔵
19	お札「高湯山神社」	(明治時代以降)		
20	高湯山のお札30余枚	(江戸時代・明治時代以降)	大信村上小屋	岡部家所蔵
21	「萬御用留帳」	元禄16年～慶応3年 (1703～1867)	三春町過足	木幡久枝氏蔵
22	「諸色留帳」	不明		

※各史料の所在に関する資料
1～4　… 福島県立博物館『企画展　福島の山岳信仰』、1996、14頁。
5・6　… 下郷町史編さん委員会『下郷町史資料目録』第1集、1993。
7　… 筆者の調査による。
8～13　… 栃木県教育委員会『栃木県史料所在目録』第14集　那須郡二、1985、175・179頁。
14～16 … 栃木県教育委員会『栃木県史料所在目録』第15集　那須郡三、98、120・122頁。
17　… 真岡市史編さん委員会『真岡市史』第7巻　近世通史編、1988、556～559頁。
18・19 … 岩瀬村史編纂委員会『岩瀬村史』第5巻　民俗編、1995、313～315頁。
20　… 大信村史編さん委員会『大信村史』第三巻　民俗編、2001、306・337頁。
21　… 三春町『三春町史』第2巻　近世、1984、743～744頁。
22　… 三春町『三春町史』第9巻　近世資料、1981、643頁。

用い，現地調査で補った。

各地に見られる史料のうち，石造物は，白湯山碑が25基と高湯山碑が13基であった。そのうち，明治時代以降に建立された石造物は，白湯山碑が3基，高湯山碑が3基である。

また，文字史料に関しては，参詣に際して作成された餞別受納帳，代参者の名が記された代参帳，白湯山または高湯山のお札など，信仰が所在したことを確認できる史料を対象とした。その結果，各地の資料より，白湯山に関する文字史料17点と，高湯山に関する史料5点が管見に入った（表1）。それらのうち，近代の史料は白湯山に関するものが2点，高湯山に関するものが3点確認できた[22]。

では，石造物・文字史料の所在地を示した図5より，信仰の分布について白湯山と高湯山に分けて考察する。まず，白湯山に関する近世の史料は，栃木県内においては黒磯市・

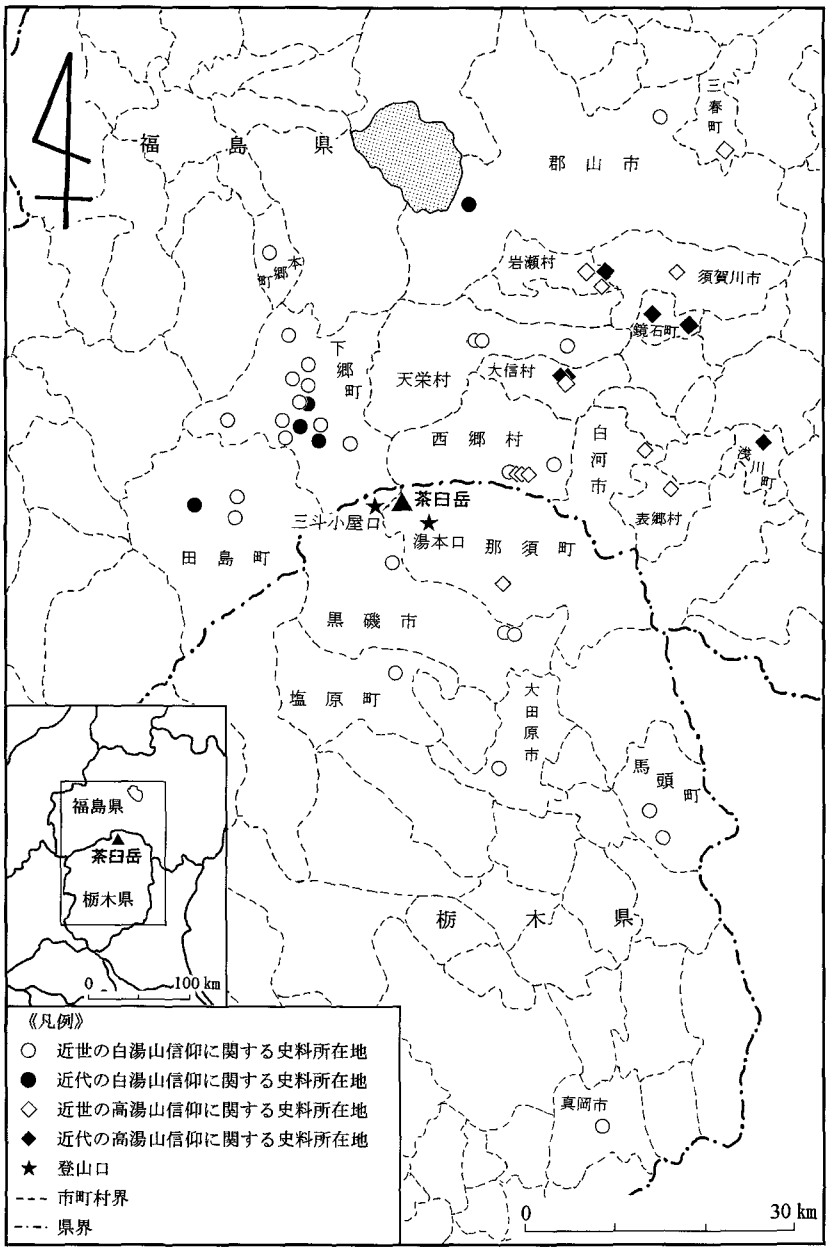

図5　各地の史料に見られる白湯山・高湯山信仰の分布

塩原町・大田原市・馬頭町の各地に見られた。真岡市にも1点のみ見られるが，真岡市の史料は，白湯山付近の三斗小屋温泉へ湯治に行った際に作成された道中日記である（表1の17）。この史料の作者は，湯治の逗留中に白湯山へ参詣を行っている。しかし，この参詣は，他の文字史料に見られる村単位での参詣とは異なり，多分に遊山的な意味合いが強いことを考慮する必要がある。なお，栃木県内においては，近代の史料は1点も確認できなかった。一方，白湯山に関する福島県内の史料は，下郷町に集中して見られるほか，

周辺の田島町・本郷町・天栄村・西郷村・郡山市などにもある。近代の史料は，田島町・下郷町・郡山市の各地に見られ，いずれも近世の史料所在地と重なっている。

福島県下郷町と田島町は，三斗小屋口の史料においても白湯山信仰が多く分布しており（図2・図3），近世から近代にかけて，白湯山信仰が盛んであったことが明らかである。また，郡山市は，白湯山から距離が離れているが，郡山市に所在する史料は近世・近代両方とも三斗小屋口白湯山に関するものであった。したがって，郡山市内では，近世・近代を通じて三斗小屋口を使用した白湯山参詣が行われていたことが分かる。

次に，高湯山信仰に関する史料の分布を見てみたい。栃木県内に見られる高湯山の史料は，那須町における近世史料1点のみであった。一方，福島県内においては，近世・近代史料とも各地に存在する。まず，近世史料は，西郷村・白河市・表郷村・大信村・岩瀬村・須賀川市・三春町に見られる。そして，近代史料は，浅川町・大信村・鏡石町・須賀川市に見られる。

このうち，福島県三春町は，三斗小屋口の史料においても，湯本口の史料においても分布が見られた（図2・図4）。したがって，三春町では，白湯山・高湯山の双方が信仰されていたことが分かる。また，西郷村は，距離的には湯本口の方が近いが，三斗小屋口，湯本口双方の史料に分布が見られた。そして，西郷村にも白湯山・高湯山の史料が見られることより，西郷村においては双方の登山口を使用して参詣が行われていたことが考えられる。

(2) 参詣事例

白湯山・高湯山信仰の分布を明らかにするうえで，これまでに用いてきた資料は，いずれも石造物・文字史料の歴史史料であった。これらの歴史史料とは異なるが，信仰の分布を明らかにする資料がもう1つ挙げられる。それは，各地で行われた民俗調査によって収集された白湯山・高湯山への参詣事例である。各地における市町村史の民俗編や，民俗調査報告書等には，白湯山・高湯山参詣の事例がいくつか収録されている。これらの参詣事例も，信仰の分布を明らかにするうえで欠かせない資料である。

参詣事例を収集するにあたっては，栃木県内と福島県南部（郡山市・会津若松市以南）の各市町村史・民俗調査報告書等を用いた[23]。そして，それらに報告されている参詣事例が行われていた地域を図示したものが，図6である。なお，各地域の使用登山口は，資料に報告された聞き取りの内容より筆者が判断して図示した。

図6に示した参詣事例のうち，参詣年代が明確にされているものは少なく，ほとんどの事例は，いつ頃行われていた参詣であるのか不明である。しかし，調査が実施された年代を考慮すると，すべて明治時代以降の参詣事例と思われる。したがって，参詣事例から判明する信仰の分布は，近代以降のものとして考察する。

図6を見ると，白湯山参詣を行っていた地域は，福島県においては下郷町に集中して見られる他，田島町・郡山市・長沼町・南郷村にも存在する。下郷町は，歴史史料においても，白湯山信仰の分布が多く見られた地域である。したがって，下郷町においては，近世から近代に至るまで一貫して白湯山信仰が盛んに行われていたことが判明する。三斗小屋宿が，会津中街道の宿場であったことは前述したが，下郷町は会津中街道の街道筋となっている地域である。下郷町の参詣者は，会津中街道を使用して白湯山参詣を行っており，街道の存在が下郷町における白湯山信仰の存続の大きな要因と思われる。

一方，栃木県内においては，白湯山に関する参詣事例の報告がまったく見られなかっ

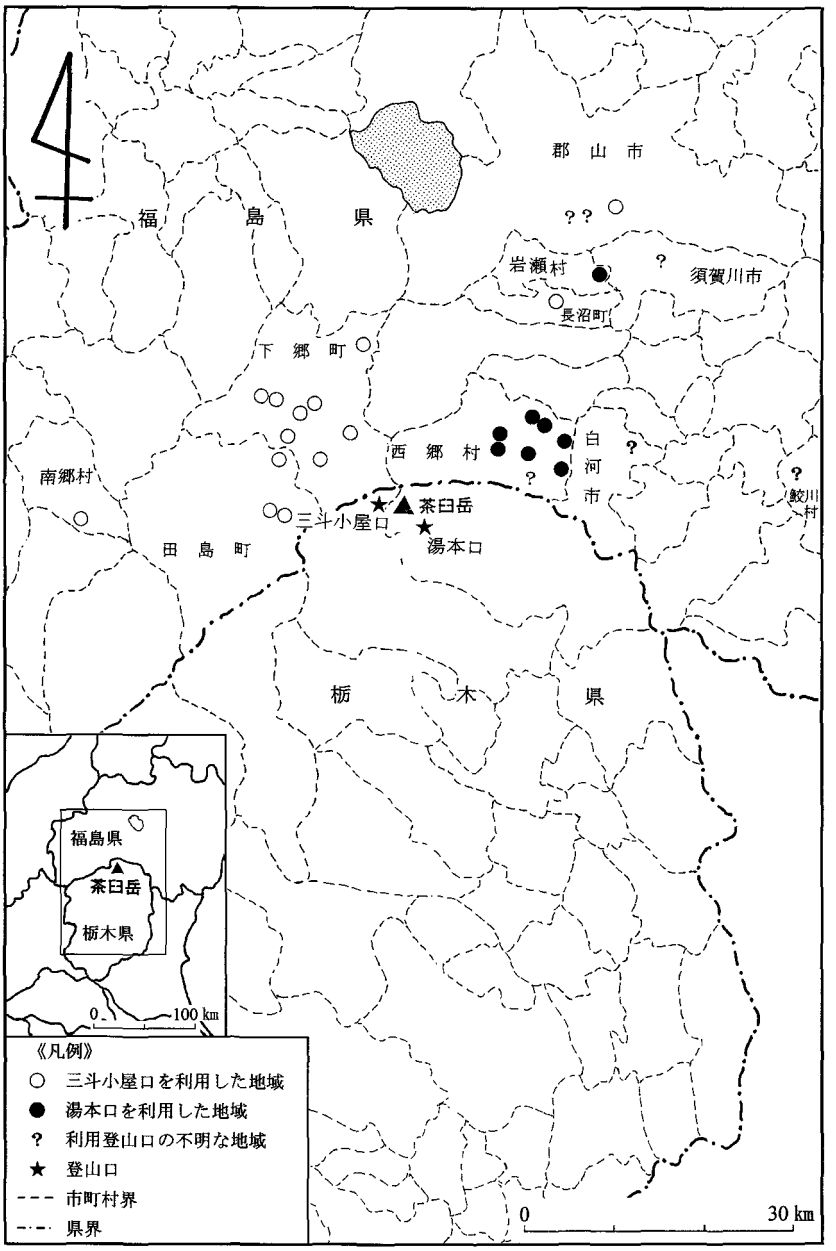

図6　参詣事例に見られる白湯山・高湯山信仰の分布

た。白湯山神社の寄付帳によれば，大正期においても栃木県で白湯山が信仰されていたことが判明する（図3）。しかし，参詣事例がまったく報告されていないことから，これらの寄付者が実際に参詣していたかどうかは疑問である[24]。

次に高湯山について考察すると，高湯山参詣を行っていた地域はほとんどが西郷村であり，他は岩瀬村にのみ見られる。西郷村においては，登山口の史料などより，江戸時代には白湯山・高湯山の両方が信仰されていたことが判明している（図2・図5）。しかし，近

代の参詣事例は湯本口を用いたもののみであり[25]，近代には高湯山参詣が盛んであったことが分かる。

また，那須町では，湯本口の石造物により，近代も高湯山信仰が行われていたことが明らかである（図4）。しかし，収集した資料の範囲では，高湯山の参詣事例はまったく見られなかった[26]。

ここで留意しなければならないのは，それぞれの市町村史・民俗調査報告書を作成するに際し，調査範囲のうち，どれほどの集落数を対象として調査が行われていたか，ということである。今回使用した資料のほとんどは，調査範囲となった地域のうちの数ヵ所を対象として調査を行っている。したがって，事例が報告されなかった地域でも，集落によっては参詣が行われていた可能性が十分にあることを考慮しなければならない。

以上，白湯山・高湯山信仰について，登山口と各地の史資料により信仰の分布を明らかにしてきた。ここで，それぞれの分布から，信仰の時代差について考察したい。まず，福島県内においては，信仰の時代差は明確に見られない。唯一挙げられるのは，前述したように，西郷村では時代が下ると白湯山信仰が見られなくなり，高湯山信仰のみとなったことである。この原因のひとつとして考えられるのが，近代における那須湯本温泉の繁栄と西郷村の関係である。那須湯本温泉は，近代になってから交通の整備が進み，温泉地として繁栄期を迎えた。そして，明治時代から昭和期にかけて，西郷村から那須湯本温泉へ，盛んに野菜等の行商が来ていたことが，筆者の聞き取り調査で明らかになっている[27]。この行商に利用されていた道は，「那須道（なすみち）」または「湯本道（ゆもとみち）」と呼称された西郷村と那須湯本を結ぶ道であり，西郷村からの高湯山参詣もこの道を使用して行われた[28]。したがって，近代の西郷村にとっては，三斗小屋宿よりも那須湯本の方が身近な存在であり，参詣も湯本口を使用して行われるようになったものと思われる。

栃木県内においては，江戸時代に参詣が行われていたことを示す史料は多く見られるが，近代における参詣事例がまったく見られない。したがって，近代には，白湯山・高湯山へ参詣する地域は激減していたことが予想される。福島県内においては近代まで各地で参詣が行われていたのに，なぜ，栃木県側では早く廃れてしまったのであろうか。中村敬の『那須』では[29]，信仰が消滅した要因の1つとして，山の景観の変化を挙げている。茶臼岳では，江戸時代より硫黄の採取が行われていたが，明治時代に「那須硫黄鉱山株式会社」が設立され，大々的な硫黄の採取を行うようになった。これにより，山中に住宅や精錬所等が設けられ，霊山の神秘的な雰囲気が壊された結果，信仰登山が廃れたとされている。また，明治14年（1881）に起こった茶臼岳の噴火により，木々が枯れ，山中が明るくなったことも，要因として挙げられている。

しかし，福島県側では同じ山に対して長く参詣が続けられており，山中の景観の変化のみが，栃木県における信仰衰退の原因であるとは考えにくい。その他の要因として，他の信仰の隆盛などが考えられるが，詳細は不明である。信仰衰退の要因については，今後の課題としたい。

Ⅳ．おわりに

以上のように，本論文では，登山口の史料や各地の史資料を用い，那須岳白湯山・高湯山信仰の分布について考察してきた。信仰の分布を概観すると，白湯山・高湯山信仰は，福島県の郡山市・三春町付近を北限とし，栃木県の真岡市付近を南限として広がっていた。しかし，真岡市の白湯山参詣は，前述したように物見遊山の要素が強い。この点を考慮すると，村単位での参詣が行われていた南

限は，馬頭町・大田原市・塩原町付近であろうと思われる。

また，栃木県内においては，那須町において白湯山・高湯山双方が信仰されていた他は，白湯山信仰の方がより広範囲に分布していた。一方，福島県内においては，白湯山・高湯山双方の信仰が行われていた地域も存在するが，概ね西郷村以北を境とし，白湯山信仰は西部に，高湯山信仰は東部に分かれて分布する傾向が見られる。その中でも，下郷町では白湯山信仰が近世・近代を通じて盛んに行われており，西郷村においては高湯山信仰が特に近代に盛んであった。これらの地域には，登山口と各地域を直接に結ぶ道が存在したことや，登山口と近距離であったことなどが，信仰が長く存続した要因として考えられる。

しかし，この信仰の分布は，近世・近代を通じて不変であったわけではない。栃木県内の白湯山信仰においては，近代以降参詣が行われなくなったと考えられる。一方，福島県西郷村においては，近世には白湯山・高湯山の双方が信仰されていたが，近代には高湯山参詣のみが盛んに行われるようになった。

白湯山・高湯山信仰は昭和20年代に消滅したが，第二次世界大戦前・戦後に参詣した人々に筆者は聞き取り調査を行っている。そこから明らかになる参詣習俗や参詣路などについては，あらためて別稿で論じたい。

（駒澤大学・院）

〔注〕

1) 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典』9　栃木県，角川書店，1984，662頁。
2) 宮田　登「山岳信仰と講集団」，日本民俗学会報21，1961，5～14頁。宮田　登「岩木山信仰―その信仰圏をめぐって―」（和歌森太郎編『津軽の民俗』，吉川弘文館，1970），277～295頁。
3) 岩鼻通明「出羽三山信仰圏の地理学的考察」，史林66-5，1983，83～128頁。岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』（名著出版，1992）所収。
4) 松井圭介「信仰者の分布パターンからみた笠間稲荷信仰圏の地域区分」，地理学評論68-6，1995，345～366頁。
5) 金子直樹「岩木山信仰の空間構造―その信仰圏を中心にして―」，人文地理49-4，1997，1～20頁。
6) 小田匡保「山岳宗教研究の地理学的諸問題―岩鼻通明著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』を評して―」，駒沢地理29，1993，135～153頁。なお，特定の信仰に関する信仰圏が時代によって変化することについては，古田悦造「近世羽黒派修験の信仰圏について」日本地理学会予稿集16，1979，270～271頁，および小田匡保「小豆島における写し霊場の成立」人文地理36-4，1984，59～73頁において，既に指摘されている。
7) 蓮実　長『増補那須郡誌』（小山田書店，1988，325頁）によると，正倉院文書における天平10年の駿河国正税帳に，役人が湯治のために下野国那須湯に下った記録が見られることが述べられている。
8) 田代音吉『三斗小屋誌』，1911，77頁。
9) 三斗小屋温泉誌刊行委員会『三斗小屋温泉誌』，1990，104頁。
10) 中村　敬『那須』，大村書店，1936，309頁。
11) 三斗小屋温泉誌刊行委員会『三斗小屋温泉誌』，1990，309頁。
12) 廣本祥子「下野国那須岳白湯山信仰に関する近世の争論について」，地方史研究303，2003，20～39頁。
13) 登山口側が有する文字史料については，三斗小屋口白湯山の史料のみ，黒磯郷土史研究会編『白湯山信仰解読史料（室井三代吉家文書）』（1994，64頁）として刊行されている。板室本村（黒磯市板室）に所在する室井家は，代々白湯山の草分けを名乗っていた家であり，白湯山の史料を含む数多くの文書が現在も保管されている。本史料集は，その室井家文書の中から，白湯山の支配に関わっ

た寺院による江戸時代の訴訟文書とその解読文を中心に所収したものである。

14) 三斗小屋宿に存在する石造物については，栃木県教育委員会編『那須山麓の民俗−黒磯市百村・板室地区−』（栃木県民俗資料調査報告書第８集，1971，103頁）において，調査報告がなされている。

15) 前掲8)，13頁。

16) 田代音吉『三斗小屋誌』（前掲８），13頁）によると，この大日如来は寛文年中に建立されたが，その後火災に遭い，頭部が破壊された。そこで，文久２年（1862）に会津白石の石工小山徳次の作によって再建された，ということである。

17) 前掲９），280〜281頁。

18) 寄付帳は，すべて黒磯市板室の室井三代吉家に所蔵されている。以下，文中において寄付帳を引用する際，注を付けて所蔵者を記すことは省略する。

19) 黒磯郷土史研究会会長の相馬賢四郎氏によると，この17人の所在地は現塩原町内の集落であろうということである。

20) この３冊の寄付帳のうち，１冊には奥付として年代が明記されていない。しかし，記載の中に大正14年（1925）８月12日という日付が書かれている。したがって，この寄付帳も他の2冊と同様に，大正14年に作成されたものと見なす。

21) 各石造物に関しては，廣本祥子「那須湯本温泉神社内の石造物より見た高湯山信仰」（駒澤大学大学院地理学研究30，2002，13〜22頁）において，詳細な考察を行った。

22) 高湯山に関する文字史料のうち，１点は大信村の上小屋に所在する30余枚のお札である（表１の20）。これらのお札のほとんどは近代に作成されたものであるが，１点のみ江戸時代に作成されたと思われるお札が存在した。したがって，この地域では，近世・近代を通じて高湯山への参詣が行われていたものとし，図５中にも近世と近代の史料の印を１つずつ記した。

23) 参詣事例の出典資料は以下に記す。大島暁雄他『日本民俗調査報告書集成　北海道・東北の民俗』（三一書房，1995，438・1077・1085頁），文化庁『日本民俗地図Ⅲ』（国土地理協会，1972，163頁），天野武監修『都道府県別日本の民俗分布地図集成』第２巻　北海道・東北地方の民俗地図２（東洋書林，2000，36頁），矢吹町編『矢吹町史』第１巻（1980，516頁），下郷町史編纂委員会『下郷町史』第５巻（1982，204〜206・399〜400頁），田島町史編纂委員会『田島町史』第４巻（1989，348頁），岩瀬村史編纂委員会『岩瀬村史』第５巻（1995，313〜315頁），西郷村史編さん委員会『西郷村史』（1978，597〜598頁），福島県白河市編『白河市史』第九巻（1990，438頁），会津民俗研究会『奥会津南郷の民俗』（1971，216頁）。

24) 筆者は図３に示した栃木県側の寄付者所在地において，白湯山信仰に関する聞き取り調査を実施した。その結果，白湯山への参詣をかつて行っていたという回答を得たのは１地域のみで，他の地域においてはすべて知らないという回答であった。したがって，白湯山への寄付を行った地域の多くが，当時参詣を行っていなかったものと考えられる。

25) 西郷村の参詣事例においては，１ヵ所使用登山口が不明の地域が存在する。この地域は，西郷村と那須湯本を結ぶ道の入り口となった地域である。したがって，近代において，この地域のみ三斗小屋口を用いて参詣していたとは考え難い。

26) 筆者の聞き取り調査によると，栃木県那須町大沢とその周辺集落においては，昭和20年代後半まで集落ごとに高湯山参詣が行われていたことが判明している。したがって，資料に報告された参詣事例のみから，近代の高湯山信仰について判断することは控えたい。

27) 那須町湯本の大丸（おおまる）温泉に在住する大高　登氏と，那須町高久丙大沢に在住する高根沢豊作氏の御教示による。

28) 西郷村史編さん委員会『西郷村史』，西郷村，1978，597頁。

29) 前掲10)，166頁。

Distribution of the Belief of Hakuyu-san/Takayu-san in the Nasu Mountains

HIROMOTO Shoko

Hakuyu-san / Takayu-san was a sacred place of mountain belief located in the Nasu Mountains on the border between Tochigi and Fukushima Prefectures. Whereas "Hakuyu -san" is the name used at the settlement for the mountain pilgrimage at the western foot of the mountains, it is called "Takayu-san" at the southeastern foot. The belief which originated in the Edo period disappeared about 1950. This paper aims to clarify the distribution of the belief of Hakuyu-san/Takayu-san and its historical change. The materials collected for the analysis are inscriptions on the stone monuments, historical records concerning the belief and description on the pilgrimage in the folk-custom investigation reports.

The results obtained are as follows:

1. The belief of Hakuyu-san/Takayu-san had spread between Koriyama City and Miharu Town in Fukushima in the north and Moka City in Tochigi in the south in the Edo period.
2. The belief still remained in the mid-twentieth century in Shimogo Town and Nishigo Village lying at the northern foot of the mountains.
3. Whereas the belief in Nishigo Village had been comprised of both Hakuyu-san and Takayu-san in the Edo period, only the latter existed after the Meiji period.
4. The belief of Hakuyu-san popular in Tochigi Prefecture in the Edo period was out of existence in the Meiji period.

Key words: Nasu Mountains, mountain belief, distribution of belief, stone monument, historical records